

〔原著〕

## 中学生の自己制御が攻撃性に及ぼす影響

関東学園大学経済学部：崔 玉芬

筑波大学人間系：庄司 一子

Influences of self-regulation on aggression in junior high school students

Yufen Cui and Ichiko Shoji

### 問題と目的

文部科学省（2008）は、智・徳・体のバランスのとれた力を「生きる力」とし、その具体的な内容は、「基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して、自ら考え判断し、行動し、表現することにより、様々な問題に積極的に対応し、解決する力」、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」、「たくましく生きるための健康な体力」としている。文部科学省はこの「生きる力」を「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」ととらえ、子どもたちが見につけるべき力、として位置づけている。子どもたちは、自らの力で自己決定し、自らを導き伸ばしていく力を身に付け、たくましく成長しなければならない。

しかし今日、いじめ、不登校、校内暴力は依然として高い水準にある（文部科学省、2012）。文部科学省（2012年）の報告「平成22年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について」によれば、校内暴力行為約6万件のうち中学校は42,987件、不登校児童生徒約12万人のうち中学生は97,428人であり、中学生の問題は依然として憂慮すべき状況である。不登校のほかにもいじめ、非行、学級崩壊などの問題が社会的にも注目されている。特にいじめによる自殺問題は深刻な問題である。このような状況において、いじめ、不登校、暴力行為は生徒指導上の3大課題であり、これらの

問題の再発防止や未然防止、早期発見、早期解決が生徒指導問題解決において重要である（八並、2009）。

中学生の時期は第二性徴による身体的変化に伴い、心身共に不安定であるだけでなく、学習や学校生活の面においても大きな変化を経験する時期である。この時期に適切な自己制御を身につけることは、この時期をうまく過ごし、様々な困難を乗り越え、課題を達成していく上で重要である。日常生活で普通の良い子がある日突然「キレる」とよく言われる。しかし子どもは突然「キレる」訳ではない（富岡、2002）。また、「キレた」子どもの中で「耐性欠如型」が最も多く70%を占める、との指摘もある（山田、2002）。それは普段、様々な面で抑圧されたことによって、問題行動につながっている可能性が高いと考えられる。

学校教育をヒューマン・サービスとしてとらえ直すときに基盤となるのが、一人ひとりの子どもの教育ニーズに応じる「心理教育的」なサービス（石隈、1999）である。学校現場で教師は、一人ひとりの子どものニーズを把握し、教育を通してこれに伝えていくことが求められる。生徒指導上の問題の予防や再発防止、早期発見、早期解決には、教師、保護者などの指導・支援を中心とした援助サービスが必要であると同時に、子ども自らが主体となって問題を克服する能力を育成することが重要であると考えられる。

柏木（1986、1988）は、「自己制御（self-

regulation)」を自己制御機能の獲得及び自己の発達に関わる個人差を捉えた上で、「自分の欲求、行動をそのまま発現してはいけない場面、抑制すべき状況におかれたとき、それを抑制、制止する」という自己抑制的側面のみならず、「自分の意志、欲求を明確に持ち、これを外に向かって表わし実現する」という自己の考えの主張・実現的側面にも注目することが重要であると指摘し、自己抑制、自己主張・実現の両面を合わせて「自己制御 (self-regulation)」と定義した。一方、庄司 (1996) は、自己制御と似た概念としてセルフ・コントロールをとりあげ、「動機がある (したい) が社会的にも個人的にも価値がないから行動しない」抑制的側面と、「動機がない (したくない) が、社会的にも個人的にも価値があるから行動する」促進的側面の両方を含むものと定義し、さらにこれを個人場面と対人場面に分けて検討した。

崔・庄司 (2013) は、中学生用自己制御尺度を開発し、信頼性と妥当性を検討した。その結果、中学生の自己制御尺度は、「自己の考えの主張」、「逸脱行為に対する主張」、「自己の欲求の抑制」の3つの下位尺度からなることが明らかになった。さらに、「自己の考えの主張」、「逸脱行為に対する主張」、「自己の欲求の抑制」の3つの側面とも学年によって得点に差があることが明らかになった。

攻撃行動は、欲求阻止や知覚された脅威などの先行事象によって誘発され、怒りの喚起・表出を伴う (濱口, 2005)。上記で述べたように、普段、様々な面で抑圧されたことによって、問題行動につながっている可能性が高いと考えられる。自己制御の一種である認知的制御は社会的情報処理と呼ばれ、児童の社会的情報処理と攻撃行動との関連が従来の研究において指摘された (濱口, 2008)。一方、欲求不満が存在しなくてもモデリングによって攻撃行動が生起することが指摘される (濱口, 2008)。森下 (1999) は、幼児期の自己制御と攻撃性との関連を検討し、自己制御が高いほど、攻撃性が低いことを指摘した。小保方・無藤 (2005) は、中学生の非行傾向行為の規定要因について検討を行い、

中学生の非行傾向行為の規定要因として学年が上がるセルフ・コントロールの影響が増加することを指摘した。

中学生の場合、攻撃性や非行傾向は自己制御の影響を受けるのであろうか。本研究は、上記の先行研究をもとに、中学生において自己制御の主張的側面と抑制的側面が攻撃行動に影響を及ぼすかどうかを検討する。

## 方 法

### 調査時期

2011年11月

### 調査対象

首都圏A県の公立中学校2校の1年～3年の男女生徒579名 (男子293名、女子286名) について、各学校1学年2クラス単位の調査を実施した。内訳は、1年生195名 (男子104名、女子91名)、2年生186名 (男子96名、女子90名)、3年生198名 (男子93名、女子105名) である。

### 調査内容

質問紙を用いて調査を行った。質問紙とその内容は次のとおりである。

#### ①フェイスシート

学年、年齢、性別の記入を求めた。

#### ②中学生用自己制御尺度

崔・庄司 (2011) が作成した「中学生用自己制御尺度」を用いた。この尺度は、自己の欲求の抑制、自己の考えの主張、逸脱行為に対する主張の3つの下位尺度 (計16項目) からなり、「いつもする (5点)」から「いつもしない (1点)」の5件法で回答を求めた。

#### ③攻撃性尺度

濱口 (2007) が作成した「反応的攻撃性尺度」を用いた。この尺度は、「報復意図」、「怒り」、「外責的認知」の3つの下位尺度 (計17項目) からなり、「はい (4点)」から「いいえ (1点)」の4件法で回答を求めた。

### 調査手続

調査は、調査対象者の確保、回収率、回答の質を確保する観点から、調査対象者の在籍する学級単位で、集団で実施された。調査実施する

場所は普段授業を受けている教室が用いられた。具体的な方法は、まず、調査実施分担者（筆者）が、調査を実施する教師全員に調査に関する説明を行い、調査中の回答で不明な点があった場合には学級担任が適宜に対応するよう求めた。学級担任が質問紙を一斉に配布し、学級担任の指示のもとで一斉に回答が求められた。質問紙は無記名式で行い、調査対象者の回答の匿名性が確保されることを質問紙に明記した。調査対象者が答えたくない場合には、答えなくてもよいこと、そのことで個人に不利益が生じないことを伝え、さらに回答が他人に知られることはないことを保証した。これらの方法はすべての学年において共通であった。統計処理には、SPSS（Version17.0）を使用した。

## 結 果

### 「中学生用自己制御尺度」の平均値と標準偏差

「中学生用自己制御尺度」の平均値と標準偏差を Table 1 に示す。

### 「反応的攻撃性尺度」の平均値と標準偏差

「反応的攻撃性尺度」の平均値と標準偏差を Table 2 に示す。

### 下位尺度間相関

「中学生用自己制御尺度」と「攻撃性尺度」の下位尺度間の相関を求めた（Table 3）。「自己の考えの主張」は「報復意図」と正の相関（ $r=.16, p<.01$ ）、「怒り」、「外責的認知」とは関連がなかった。「逸脱行為に対する主張」は「報復意図」、「怒り」、「外責的認知」とは関連がなかった。「自己の欲求の抑制」は「報復意図」、「怒り」と負の相関（それぞれ  $r=-.17, p<.001$ ； $r=-.14, p<.01$ ）が見られた。

### 自己制御との関連

「自己制御尺度」が「攻撃性尺度」をどの程度予測するかを調べるため、「攻撃性尺度」を構成する 3 変数（「報復意図」、「怒り」、「外責的認知」）を従属変数、「自己制御尺度」を構成する 3 変数（「自己の考えの主張」、「逸脱行為に対する主張」、「自己の欲求の抑制」）を独立変数とする重回帰分析を行った（強制投入法）。得られた結果を Figure 1 に示す。

Table 1 自己制御尺度の項目平均および標準偏差（ $N=579$ ）

項 目	平均	（標準偏差）
自己の考えの主張		
12. 自分のやりたいことに、自分から進んで参加する。	3.88	(1.06)
13. 集団での話し合いの時、積極的に参加し、発言する。	3.12	(1.28)
6. 周囲の人と自分の意見が違ってても、自分の意見を主張する。	3.12	(1.13)
5. 自分がいやだと思ったことを、人に言う。	3.55	(1.19)
9. 今までやってみたかったことを親に反対されても、がんばってお願いする。	3.65	(1.20)
15. 順番に並んでいる時に横から割り込んで来た人に注意する。	3.55	(1.29)
11. 親や先生の説教を聞いている途中でも、自分の意見を言う。	3.25	(1.29)
自己の欲求の抑制		
1. ゲームで遊んだり、テレビを見たり、好きな本を読んだりしたいけど、勉強する。	3.46	(1.02)
3. 学校で疲れ、家に帰って早く寝たかったが、テスト勉強をする。	3.55	(1.15)
16. 友だちに遊ぼうと言われたが、勉強をしようと思って、遊ばない。	2.96	(1.18)
10. ためたお金はほしいものがあったても、使わない。	2.85	(1.18)
7. 一度立てた計画（予定）は、どんなことがあっても、実行する。	3.08	(1.02)
14. 授業中、好きな本を読んだり、おしゃべりをしたかったが、がまんする。	3.76	(1.13)
逸脱行為に対する主張		
4. 悪いことをしている人に注意する。	3.20	(1.00)
2. 友だちが学校のルールを守っていなかった時、だめだと伝える。	3.19	(1.02)
8. 友だちが嫌がらせや悪ふざけなどをしている時、よくないと言う。	3.13	(1.06)

自己制御の「自己の考えの主張」から「報復意図」に正のパスが示された。「逸脱行為に対する主張」,「自己の欲求の抑制」から「報復意図」に負のパスが示された。「自己の欲求の抑制」から「怒り」に負のパスが示された。

## 考 察

本研究の目的は、中学生の自己制御の主張的側面と抑制的側面が攻撃行動に影響を及ぼすかについて検討することであった。

「攻撃性尺度」を従属変数,「自己制御尺度」を独立変数とする重回帰分析を行った結果,「自己の考えの主張」から「報復意図」に正の影響及ぼすこと,「逸脱行為に対する主張」,「自己の欲求の抑制」から「報復意図」に負の影響,「自己の欲求の抑制」から「怒り」に負の影響を及ぼすことが示された。

「自己の考えの主張」から「報復意図」に正の影響及ぼすことから,自己の考えを主張することによって,報復意図の攻撃行動が高くなることが明らかになった。濱口(2005)は,攻撃行動

Table 2 攻撃性尺度の項目平均および標準偏差 (N=579)

項目	平均	標準偏差
報復意図		
* 2 ひどいことをされても、し返ししようとは思わない。	2.64	(.99)
4 乱暴なことをされたら、同じくらいひどいめにあわせたい。	2.47	(1.11)
6 文句を言われたら、逆に相手をやっつけたくなる。	2.59	(1.04)
* 8 嫌なことをされたとしても、やり返そうとは思わない。	2.72	(1.01)
9 仲間はずれにされたら、何かし返しをしたくなる。	2.19	(1.02)
10 じゃまをされたら、やり返さずにはられない。	2.23	(1.01)
13 嫌なことをされたら、倍にして返したい。	2.33	(1.13)
怒り		
1 ちょっとしたことでもカッとなりやすい。	2.29	(1.08)
12 いったん腹を立てると、なかなかおさまらない。	2.22	(1.02)
14 頭にきたことは、いつまでも忘れない。	2.26	(1.07)
16 怒りは長く続く方だ。	2.01	(1.02)
17 腹が立つ時は、おさえられないほど怒りがこみ上げる。	2.21	(1.11)
外責的認知		
3 わたしが誰かともめたとしたら、悪いのはだいたい相手の方だ。	2.44	(.90)
* 5 人とけんかになる時は、だいたいわたしに問題がある。	2.89	(.80)
* 7 人に嫌なことをされたとしたら、それは自分が悪いからだ。	2.78	(.87)
* 11 人がわたしに文句を言うのは、わたしにいけないところがあるからだ。	2.46	(.94)
15 わたしによくないことが起きたとしたら、それはたいてい人のせいだ。	2.04	(.88)

\*逆転項目

Table 3 自己制御と攻撃性の各下位尺度間の相関係数

	1. 自己の 考えの主張	2. 逸脱行為 に対する主張	3. 自己の 欲求の抑制	4. 報復意図	5. 怒り	6. 外責的認知
1. 自己の考えの主張	—			.16**	-.00ns	.01ns
2. 逸脱行為に対する主張		—		-.06ns	-.06ns	-.03ns
3. 自己の欲求の抑制			—	-.17***	-.14**	-.02ns
4. 報復意図				—	.49***	.19***
5. 怒り					—	.07ns
6. 外責的認知						—

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$

は、欲求阻止や知覚された脅威などの先行事象によって誘発され、怒りの喚起・表出を伴う、と指摘した。自己の考えを主張するにあたって、上手く相手に受け入れられない場合、自己を制御する欲求が阻止され、「報復意図」の攻撃行動が高まる可能性が考えられる。「逸脱行為に対する主張」、「自己の欲求の抑制」から「報復意図」に負の影響、「自己の欲求の抑制」から「怒り」に負の影響を及ぼすことが明らかになった。小保方・無藤（2005）は、中学生の非行傾向行為の規定要因として、学年が上がるとセルフ・コントロールの影響が増加すると指摘した。本研究は上記の研究結果を支持する結果になっている。悪いことをしている相手に注意したり、自分の感情や欲求を抑えることによって、「報復意図」の攻撃行動は低下することが考えられる。さらに、自分の感情や欲求を抑えることによって、「怒り」の攻撃行動が低下することが考えられる。

なお、「自己の考えの主張」、「逸脱行為に対する主張」、「自己の欲求の抑制」の自己制御が、攻撃性に与える影響をみると、統計的に有意と

はいえ、値として大きな影響とは言い難い。尺度上では弱い正・負の影響を及ぼしたが、両者の間には何らかの媒介要因があるのではないかと考える。今後この点についてさらに検討する必要がある。

本研究において、自己の考えの主張が上手く相手に受け入れられるかどうかは検討しなかった。自己の考えを主張するにあたって、上手く相手に受け入れられない場合、自己を制御する欲求が阻止され、「報復意図」の攻撃行動が高まる可能性があることが推測され、今後、この点についてさらに検討する必要があると考える。

## 引用・参考文献

- 崔 玉芬・庄司一子（2011）. 中学生用自己制御（Self-Regulation）尺度の検討 日本教育心理学会総会発表論文集, 53, 534.  
 崔 玉芬・庄司一子（2013）. 中学生の自己制御（self-regulation）尺度の開発 学校心理学研究, 13, 3-14.  
 濱口佳和（2005）. 自記式能動的攻撃性尺度（中

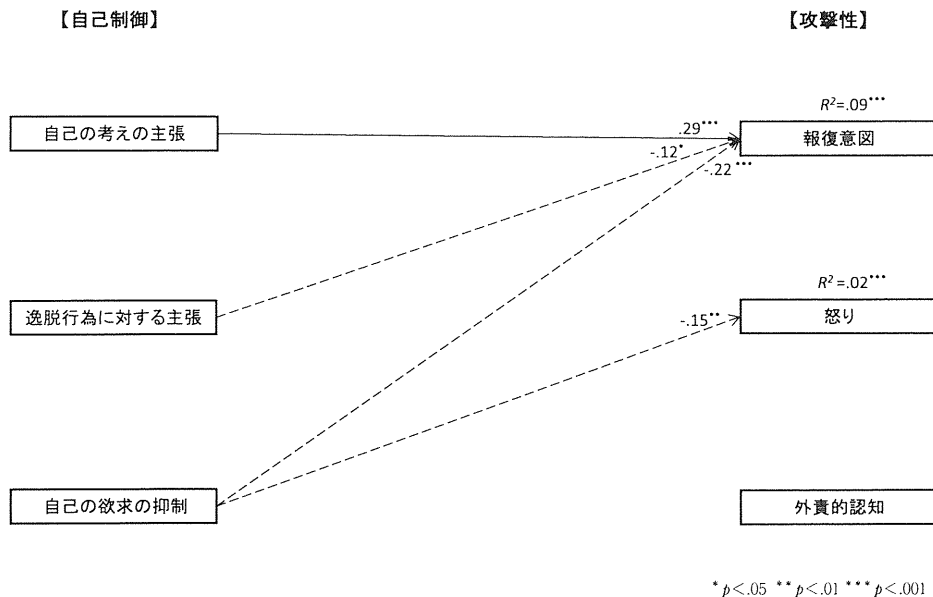


Figure 1 中学生の自己制御と攻撃性とのパス図  
 （有意でないパスは省略；正のパスは実線，負のパスは点線で示した）

- 学生用)の構成 カウンセリング研究, 38, 183-194.
- 濱口佳和(2007). 自記式反応的攻撃性尺度(中学生用)の構成 カウンセリング研究, 40, 136-145.
- 濱口佳和(2008). 認知的コントロール 渡辺弥生・伊藤順子・杉村伸一郎(編)原著で学ぶ社会性の発達. ナカニシヤ出版, pp.112-119.
- 石隈利紀(1999). 学校心理学 誠信書房
- 柏木恵子(1986). 自己制御(self-regulation)の発達心理学評論, 29, 3-24.
- 柏木恵子(1988). 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会
- 森下正康(1999). 幼児期の自己制御と思いやり・攻撃性, 親子関係との関連 日本教育心理学会総会発表論文集, 41, 236.
- 文部科学省(2008). 新学習指導要領・生きる力<[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/idea/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/index.htm)> (2011年5月12日)
- 文部科学省(2012). 平成22年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/24/02/\\_icsFiles/afieldfile/2012/02/06/1315950\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/02/_icsFiles/afieldfile/2012/02/06/1315950_01.pdf)> (2012年3月21日)
- 小保方晶子・無藤 隆(2005). 親子関係・友人関係・セルフ・コントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因, 発達心理学研究, 16, 286-299.
- 庄司一子(1996). 幼児・児童のself-controlの発達とその規定要因に関する研究 風間書房
- 富岡賢治(2002). 「キレた」子どもの事例の分析視点と成長歴に関する要因の検討 国立教育政策研究所内「発達過程研究会」(編)「突発性攻撃的行動および衝動」を示す子どもの発達過程に関する研究—「キレる」子どもの成育歴に関する研究— pp.176-177.
- 山田兼尚(2002). 「キレた」子どもの事例の分析視点と成長歴に関する要因の検討 国立教育政策研究所内「発達過程研究会」(編)「突発性攻撃的行動および衝動」を示す子どもの発達過程に関する研究—「キレる」子どもの成育歴に関する研究— pp.8-22.
- 八並光俊(2009). 生徒指導における学校心理学・学校心理士の広がりと展望 日本学校心理学会年報, 2, 45-53.